

2011年3月11日から

From 11 March 2011

関西大学 社会安全学部

中村 隆宏

Faculty of Safety Science, Kansai University

Takahiro NAKAMURA

1. そのとき

デスクワークの最中だった。突然、めまいを感じた。ここ数日間の自分の体調について考えようとした。しかし、何か違和感があった。“違う、揺れている…”そう理解するまで、しばらく時間がかかった。記憶にあるどの地震とも異なる、異様な揺れだった。デスクの電話が鳴った。上の階のゼミ室からだった。「揺れていますよね?」「ああ、揺れているな。」他人事のように冷静に返す自分の声に、また違和感を覚えた。

震源は東北地方の太平洋側らしい。携帯電話を取り出し、無駄を承知でダイヤルした。しばらくの沈黙の後、思いがけず呼出し音が鳴った。このチャンスを逃せば、恐らく当分の間、電話がつながらなくなることは分かっていた。それでも、呼出し音が続くだけだった。“単に留守にしているのか、あるいは…”と考えながら、応答のない電話を切るしかなかった。

2. その後の数日間から数週間

福島は、筆者が生まれてから18年間、育った地である。現在も、親兄弟をはじめ親類縁者が暮らす。

地震発生からしばらくして、ごく稀にはあ

るが携帯電話がつながるようになり、故郷の様子も次第に把握できるようになった。家屋に多少の被害があったものの、幸い直接的な人的被害はない、との知らせに安堵した。ライフラインの復旧の目処は立たず、こちらから物資を送ろうにもその手段がなかったが、近隣の協力もあって、生活は不自由ながらも生存が危ういような事態ではない、とのことで、二度安堵した。

しかし一方では、並行して、はるかに深刻な問題が大きくなっていった。骨組みが露わとなった原子炉建屋がテレビ画面に映し出されてすぐ、気象サイトで天気図と現地の風向を確認した。現場から直線で約60kmの距離。すぐに絶望するような条件ではないにせよ、安心できる材料もなかった。

公共交通機関はまだ復旧の目処も立たず、よしんば復旧したとしても、幼い甥と姪は長時間の移動に耐えられそうにない。自家用車で移動するにも、通行可能な経路は把握できてもガソリンを入手できる見通しが立たない。そして何よりも、福島に根差した暮らしを送る彼らに対し、先行きが見えない状況を抱えたまま住み慣れた故郷を離れるよう無理強いすることはできなかった。

自宅ではテレビが主な情報源だった。在宅時

はほぼ常に、震災と原発事故に関連するニュースが流れていた。その影響か、間もなく4歳を迎える長男は次第に落ち着きをなくし、情緒不安定になっていった。

同じ頃、職務上でも様々な悩みに直面することとなる。全く経験のない事態に対して、何を判断の根拠とすべきか、どこまで独自に判断して良いのか、手探りが続いた。事態は時々刻々と変化するとともに、情報の信憑性を疑い始めればきりがなかった。内外の様々なレベルで、相容れない主張の板挟みとなることもあれば、的を射ない議論に翻弄されることもあった。

“あれこれ悩まず、現地に足を運んでみるだけでも…”と、思わなくはなかった。しかし、どんな大義名分があるとしても、何もできないまま故郷を素通りする気にはなれなかった。自らの職責と立場を踏まえ、個人として、一教員として、研究者のはしくれとして、一体自分に何ができるのか、何をすべきなのかを何度も自問した。

3. 今、そしてこれから

結局、日頃から備えていない事柄に対して何かをしようにも、付け焼刃では実現できないことを痛感させられた。所詮は個人の力の限界なのか、あるいは能力不足なのか。いずれにしても、歯がゆさとやり切れなさばかりが残る。一方で、震災によって目の前に突き付けられた多くの難題は、震災に起因して新たに発生したものであるというよりもむしろ、潜在していて意識されることすらなかった、あるいは意識することを避けてきた多くの歪みが、震災を機に表面化しただけのようにも思えた。

震災、復興、原発事故、そしてこれらに関わる様々な問題について、ヒューマンエラー研究の立場から何らかの見解を示すべきだ、といったプレッシャーもある。しかし筆者は、震災発生直後はもちろん、現時点でも何かを言える立場にはない、と考えている。

結果を知る立場から、どこが間違っていたのか、何がまずかったのかを“後付け”で指摘し、批判することは容易である。一方で、ヒューマンエラーに関わる問題に取り組む上で重要なのは、当時、当事者らを取り巻いていた状況や環境、与えられた条件がどのようなものであったのかを把握し、当時彼らが考えていたことと彼らを選択した行動にどのような合理性（たとえ、それが局所的・限定的であったとしても）があったのかを、彼らの立場から理解しようとすることである^[1]。こうした観点から問題の核心に手を伸ばすことができるまで、もう少し時間が必要である。そして、その時が来るまで注意深く見守り続けなければならない。

震災に限らず、どのような事態に遭遇しようとも、付け焼刃では役に立たないことに変わりはない。ならば、日頃から備えていた事項をターゲットにして注力すればよい。方向を見失うことなく、たとえわずかでも前へ進み続けるなら、いずれ大きなベクトルと合流できるはずだ。

参考文献

- [1] シドニー・デッカー著 小松原明哲／十亀洋監訳（2010）. ヒューマンエラーを理解する—実務者のためのフィールドガイド 海文堂 pp.31-86